

縄文時代中期後葉から後期前葉の集落遺跡の検討
－印旛郡酒々井町墨古沢遺跡・墨古沢南Ⅰ遺跡と関連遺跡を中心に－

小 澤 政 彦

目 次

はじめに	233
1 本稿での時期設定	233
(1) I期	233
(2) II期	236
(3) III期	236
(4) IV期	236
(5) V期	236
(6) VI期	236
(7) VII期	236
(8) VIII期	238
(9) IX期	238
2 各遺跡の時期的な動態について	240
(1) 対象遺跡と分析方法について	240
(2) 墨古沢遺跡	240
(3) 墨古沢南Ⅰ遺跡	241
(4) 墨新山遺跡	241
(5) 墨木戸遺跡	241
(6) 墨古沢南Ⅱ遺跡、墨広畑遺跡	245
3 各遺跡における時期ごとの動態の分析	245
(1) I期	245
(2) II期	245
(3) III期	245
(4) IV期	245
(5) V期	245
(6) VI期	251
(7) VII期	251
(8) VIII期	251
(9) IX期	251
4 縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての集落遺跡の動態について	251
おわりに	257

はじめに

縄文時代中期後葉の関東地方では、同一遺跡に多くの住居跡が環状に構築されるいわゆる「環状集落」と呼ばれる集落跡が認められる。特に南西関東では加曽利E3式の中頃までに各地で「環状集落」が認められるが、加曽利E3式の新しい段階から加曽利E4式期にかけて、「環状集落」は終焉するとともに遺構数、遺跡数の激減という現象が認められ注目されてきた。この中期末葉から後期初頭にかけては、上述の現象に加え、西日本系土器の出現、柄鏡形住居跡の構築、中期に盛行した土偶が出土しなくなるなど、大きな社会の変化が認められ、気候変動などと合わせて研究がなされてきた。またこの次の時期である後期前葉になると、各地で集落跡が確認できるようになり、遺跡数、遺構数が回復する様相が捉えられてきた。千葉県を中心にこの時期の集落様相の研究を進めてきた加納実は、中期の「環状集落」について、「同一地点での反復居住・集会的居住」がなされたと考えており、環状集落の終焉の時期には、「非居住域への分散居住」へ居住形態が変化したと捉えている（加納1995）。

このように中期から後期にかけて認められる社会の変動に迫るためには、より細かな視点で検討することが必要であると考え。ここでは当該期の集落跡が調査された印旛郡酒々井町に所在する墨古沢遺跡と墨古沢南Ⅰ遺跡^(註1)、それに隣接する墨木戸遺跡、墨新山遺跡、墨広畑遺跡、墨古沢南Ⅱ遺跡の集落の時的な動態を検討することで、当該期の社会様相について若干の考察を行っていく。

1 本稿での時期設定（図1・2）

ここでは、本稿の分析で使用する時期設定について説明する。時期設定に際しては、分析対象とした遺跡から出土した土器を中心に行った。対象とする時期は、中期後葉の加曽利E式から後期前葉の堀之内式にかけてであり、出土土器や集落様相から9期に分けた。

なお加曽利E式の編年については、細別呼称に混乱が生じている現状がある。本稿では山内清男（山内1940→1967、1969→1974）以来の編年に基づき、アラビア数字による細別呼称を用いた編年を使用する。すなわち胴部に磨消縄文が成立したものを加曽利E3式とする。また武蔵野台地や多摩丘陵で設定された縄文中期のもっとも細かい編年とされる、いわゆる「新地平編年」（小林・黒尾・中山2004）と千葉県の加曽利E式土器の対比を行った大内千年の研究（大内2008）を参考にして、加曽利E式期の時期設定を行った。称名寺式成立後に残存する加曽利E式については、「加曽利EV式」（石井1992）の呼称を使用する^(註2)。

(1) I期

中期中葉末から後葉初頭の時期で、加曽利E式の成立期である。中期中葉の勝坂式、阿玉台式の終末に伴う「中峠諸類型」（下総考古学研究会1998）の土器が展開する時期でもある。図1の1、2は中峠0地点型深鉢である。1は山形の波状口縁と口縁部の隆線上に縄文が施されることから阿玉台式の影響を受けていると考えられる。2は典型例であるが、隆線上に刻みを持つ点は勝坂式の影響が認められる。3は中峠0地点型深鉢と加曽利E式の折衷土器と考えられる。口縁部の上半部は中峠0地点型深鉢、下半部は加曽利E式と考えられる。なお波状の隆線は東関東の加曽利E1式によく認められるものである。4は中峠6次1住型深鉢である。この時期の土器は中期中葉の土器型式の影響を残すものも多く、多様な系譜を持つ土器が入り乱れた様相を示す。

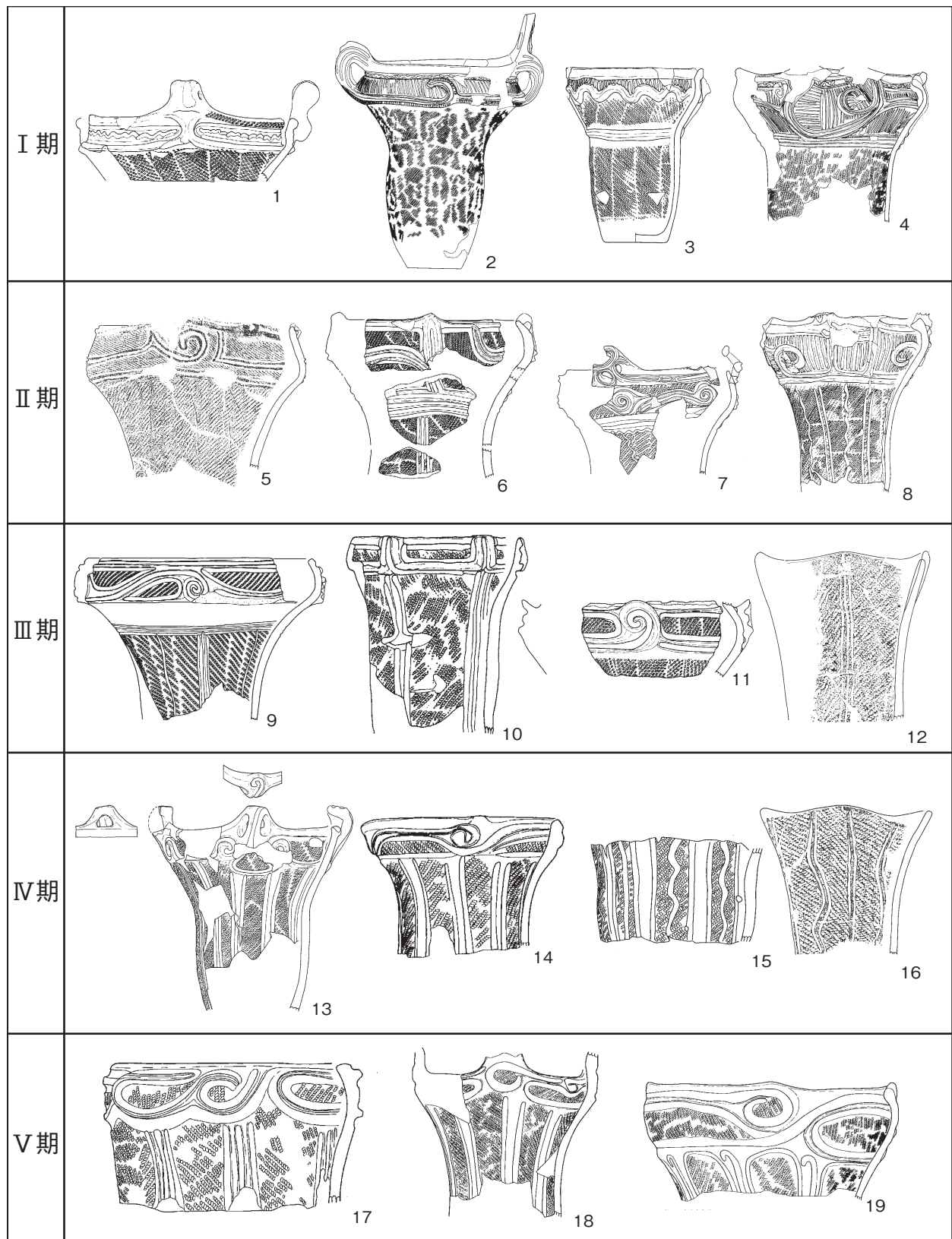


図1 本稿における時期設定(1)(I期~V期)

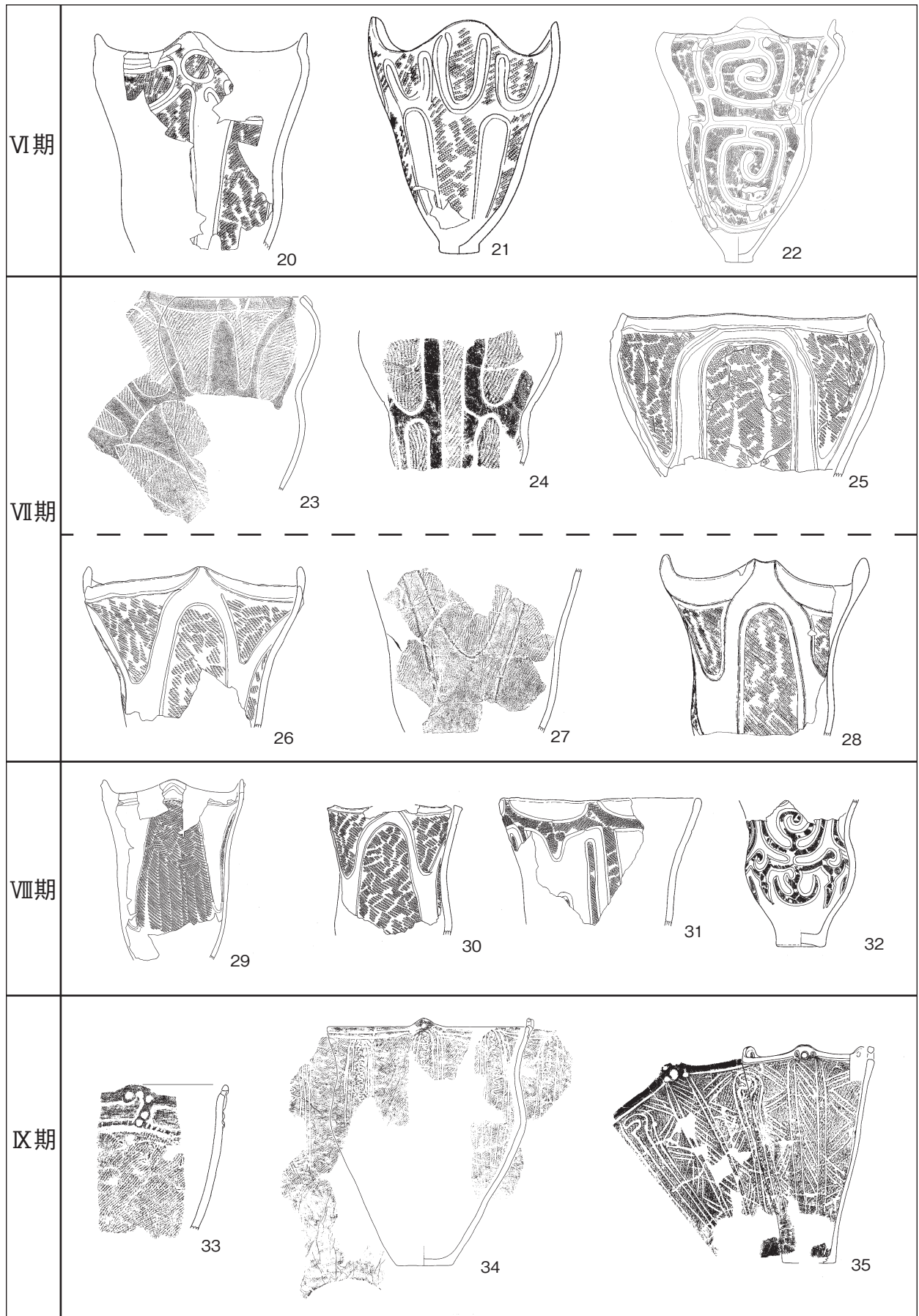


図2 本稿における時期設定(2)(VI期~IX期)

(2) Ⅱ期

加曽利E 1 式期をⅡ期とした。加曽利E 1、2 式の特徴は大村がまとめており（大村1995、2017）、それを参考にした。図1の5～8が当該期の土器であり、いずれも口唇部上端に沈線が引かれている。5は口縁部に剣先文と渦巻文が施される。6は口縁部にクランク文、胴部に沈線で懸垂文が施される。7、8は当該期に特徴的な突起が施される。8は中峠6次1住型深鉢の影響を強く受けた加曽利E 1 式である。胴部に加曽利E 1 式に特徴的な懸垂文が施されている。

(3) Ⅲ期

加曽利E 2 式期をⅢ期とした。9、10は、隆線の整形が丁寧（大村2017）という特徴が認められる。9は頸部無文帯を持つ。10は胴部の懸垂文が途中で広がって収束し、その下から再び懸垂文が施されている。大木8 b 式の影響と推測される。11は口縁部文様のみであるが、突起状になる渦巻文と隆線の区画が施されている。12は口縁部文様を欠くものである。こういった土器は次の加曽利E 3 式によく見られるが、本例は沈線間に磨消がなされないことから、加曽利E 2 式と捉えた。

(4) Ⅳ期

加曽利E 3 式の古段階とした時期で、「新地平編年」12 a 期に相当する段階である。胴部に磨消縄文が施されることが特徴であるが、磨消部分は狭い。口縁部には加曽利E 2 式から続く渦巻文や楕円区画を持つことが特徴的である。また胴部には蛇行懸垂文を持つものもある。13、14は口縁部には渦巻文と楕円区画が施され、胴部には幅の狭い磨消縄文が認められる。13には特徴的な突起が付される。15は胴部のみであるが、磨消縄文間に蛇行懸垂文が施される。16は口縁部文様を欠くもので、狭い磨消縄文が認められる。

(5) Ⅴ期

加曽利E 3 式の中段階とした時期で、「新地平編年」12 b 期に相当する段階である。Ⅳ期のものに比べ、口縁部文様は渦巻文と楕円区画が崩れ、一体化していく様相が見られる。また渦巻文は円文化し、文様内部に地文である縄文が施されるようになる。これに加えて口縁部と胴部の区画が曖昧になっていく。17は胴部文様に古い様相を残すが、口縁部と胴部の区画は崩れている様相が認められる。18も17と同様である。19は胴部の懸垂文同士が口縁直下で結合し、磨消帯の中には蕨手状の懸垂文が施される。

(6) Ⅵ期

加曽利E 3 式の新段階とした時期で、「新地平編年」12 c 期、加納実の「加曽利E Ⅲ式」の成立期に当たる。この時期は「横位連繫弧線文土器」（加納1994）と「意匠充填系土器」（加納1994）が成立する。一方でキャリパー形土器は文様構成を崩しながら、存続している。加納はこの時期のキャリパー形土器の特徴を挙げている（加納1989）。図2の20は「胴部懸垂紋と口縁部紋様の癒着」（加納1989：217P）が認められる。21は「横位連繫弧線文土器」、22は「意匠充填系土器」である。

(7) Ⅶ期

中期終末の加曽利E 4 式期である。加曽利E 4 式は古段階と新段階の2段階に分けられると考えられるが、今回集落様相を捉えるうえで、一括して扱うこととした^(註3)。なお加曽利E 4 式の古段階は、「新地平編年」13 a 期、加納実の「加曽利E Ⅲ式新」に当たり、加曽利E 4 式の新段階は「新地平編年」13 b 期、加納実の「加曽利E Ⅳ式」に相当する（加納2024）。

Ⅶ期は「対向U字交錯文類型」（稲村1990）が成立する時期である。千葉県有加曽利E 4 式は、「対向U字交錯文類型」が主体を占め、他の類型はほとんど認められない地域の特徴があり（小澤2024 a）、今回



図3 分析対象遺跡の位置及び周辺の遺跡 (千葉県教育委員会2018を改変)

対象とした遺跡も同様である。今回Ⅶ期とした中でも、古い様相を持つものが23～25である。23は「抱球文」と複雑な「対向U字交錯文」が認められる。24は帯縄文による懸垂文と「対向U字交錯文」が施されている。25も隆線による「対向U字交錯文」を持つが、逆U字状文の幅が広く無文部が狭い。

27～29は、Ⅶ期の中でも新しい様相を持つ。器形のくびれが緩くなり、口縁部の内弯も弱くなる傾向が認められる。沈線または隆線で「対向U字交錯文」が施されている。

(8) Ⅷ期

Ⅷ期は称名寺式に相当する。称名寺式は3大別7細分の段階編年（石井1992、鈴木1990 a・b、2007、称名寺式土器検討会2017）が示されているが、今回分析対象とした遺跡からは、称名寺式成立期である第1段階から第3段階にかけてのみ個体資料が検出されている。称名寺式成立後にも残存するいわゆる「加曾利E V式」とした土器は、千葉県では称名寺式第3段階ではほぼ確認できなくなることに加え、称名寺式の細分編年での時期比定が難しいことから、古段階として一括することとした。29、30は「加曾利E V式」である。29は逆U字状の文様の下端が横位に連結するのが特徴的である。30は口縁部が内弯せずに立ち上がり、口唇部に平坦面が認められ、器形に称名寺式の影響が認められる。31は称名寺式第2段階、32は文様がやや複雑化していることから第3段階と捉えておきたい。称名寺式第1段階の土器は、破片のみが出土しており、個体資料は出土していないことから、ここでは図示しなかった。また称名寺式中段階、新段階は、今回の分析対象遺跡からは遺構が検出されていない。

(9) Ⅸ期

堀之内式に相当する時期とした。堀之内式は1式、2式と分かれるがここでは後期前葉の集落様相を捉えるために、幅広く時期を設定した。今回対象とした遺跡では、堀之内式成立期の土器は皆無であった。堀之内1式の編年については、5段階に細分する編年が示されている（石井1993）。33は口縁部に隆線で文様が施されることから第2段階と捉えられるが、この土器が管見に触れる限りもっとも古い。34は第3段階と考えられる。口縁部に沈線が引かれ、胴部に蕨手文が施される。35は第4段階と考えられる。朝顔形深鉢の器形に蕨手文と斜行文が施される。なおⅨ期には堀之内2式も含めているが、住居跡1軒のみで個体資料も認められない。時期設定がやや雑駁であるが後期前葉の様相を捉えるために、時期幅を広くⅨ

表1 各時期ごとの遺構数集計表

遺跡名	時期	住居跡	土坑
墨古沢遺跡	I期	3	13
	II期	10	13
	III期	4	7
	IV期	18	5
	V期	2	6
	VI期	5	1
	Ⅶ期	0	0
	Ⅷ期	0	0
	Ⅸ期	15	13
	不明	22	239
墨古沢南 I	I期	0	0
	II期	0	0
	III期	0	0
	IV期	1	2
	V期	7	17
	VI期	15	42
	Ⅶ期	14	39
	Ⅷ期	7	50
	Ⅸ期	0	0
	加曾利E後半	3	18
	不明	15	118
墨新山遺跡	I期	0	0
	II期	0	0
	III期	0	0
	IV期	0	0
	V期	3	0
	VI期	6	2
	Ⅶ期	3	2
	Ⅷ期	0	0
	Ⅸ期	0	0
	加曾利E後半	1	2
	不明	4	34
墨木戸遺跡	I期	1	1
	II期	1	6
	III期	0	1
	IV期	2	7
	V期	39	18
	VI期	6	6
	Ⅶ期	0	1
	Ⅷ期	0	0
	Ⅸ期	0	0
	加曾利E後半	6	0
	不明	1	433

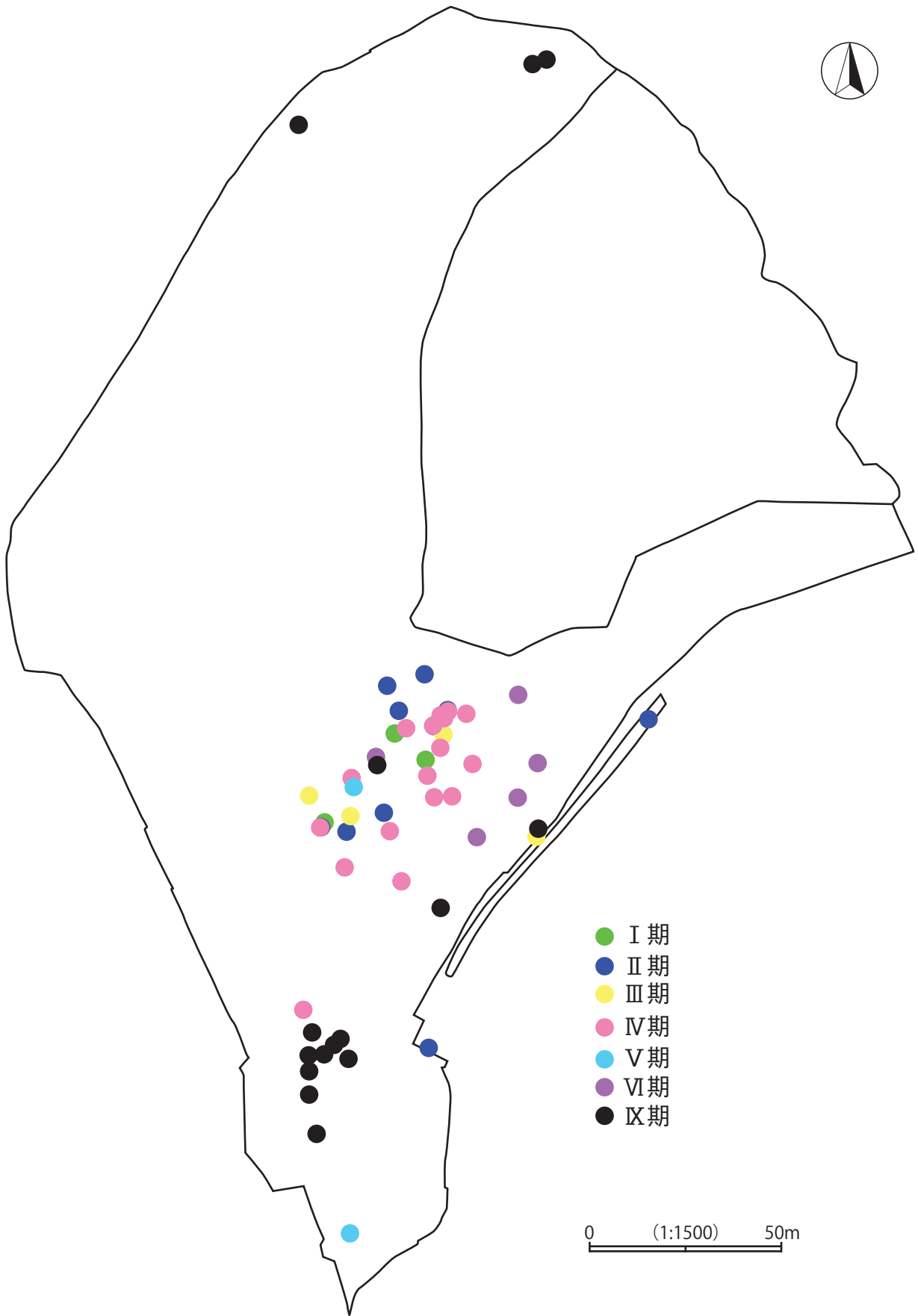


図4 墨古沢遺跡の住居跡分布図

期を設定した。

2 各遺跡の時期的な動態について

(1) 対象遺跡と分析方法について (図3)

今回分析対象とする墨古沢遺跡、墨古沢南Ⅰ遺跡、墨木戸遺跡、墨新山遺跡、墨古沢南Ⅱ遺跡、墨広畑遺跡は印旛沼の南側、鹿島川に流入する高崎川中流域左岸の標高約36mの台地上に所在する。台地の北側には高崎川、南側には勝田川が流れており、各河川から伸びる支谷が樹枝状に入り込み、台地が複雑に開析されている。勝田川は佐倉市内で南部川と合流し、その先で高崎川と合流する。高崎川は鹿島川に流入して印旛沼に注いでいる。

本稿では、上述の対象遺跡について、住居跡と土坑について各時期の数量をカウントし、表を作成した(表1)。また時期ごとに住居跡の配置図を作成し、検討を行う。

(2) 墨古沢遺跡 (図4)

墨古沢遺跡は、高崎川から直接伸びる谷に面する台地に立地している。今回分析対象とする遺跡の中では最も北側に位置し、高崎川の本流に最も近い。2回の調査が行われた((財)千葉県文化財センター1981、(財)千葉県教育振興財団2007)本遺跡からは、縄文時代早期から晩期にかけて、住居跡118軒、土坑390基、屋外埋設土器2基、遺物集中地点5か所等が検出されている。今回分析対象とした遺跡の中でも、圧倒的な遺構、遺物量が出土しており、断続的ではあるが集落として使用された期間も長い。住居跡は、阿玉台Ⅰb式から確認され、中期中葉の時期から集落が開始される。中期中葉の時期は、他の遺跡では居住活動が低調であり、墨広畑遺跡に1軒認められるのみである。Ⅰ期には住居跡3軒と低調であったが、Ⅱ期には10軒と増えている。Ⅲ期には4軒とやや住居数が減っている。Ⅳ期には18軒と大幅に増加するが、その後Ⅴ期、Ⅵ期と数を減らしていき、Ⅶ期には居住痕跡が確認されなくなってしまう。続くⅧ期にも居住痕跡が確認されないが、Ⅸ期には15軒検出されており、居住活動が再開される。上述したようにⅨ期は堀之内式全体の時期を対応させているが、今回対象とした遺跡からは堀之内式成立期の土器の出土は皆無である。また分析対象とした遺跡の中でこの時期に居住痕跡が認められるのは墨古沢遺跡のみである。その墨古沢遺跡においても堀之内Ⅰ式の中～新段階と捉えられるものもわずかであり、住居跡や遺物集中地点から出土する土器の多くは堀之内Ⅰ式の中～新段階である。墨古沢遺跡においては、Ⅶ期とした加曾利E4式から後期初頭の称名寺式、そして堀之内Ⅰ式の成立期まで、住居跡をはじめとする居住痕跡が確認できない。しかし検出された遺物集中地点からは、称名寺式中段階から新段階の破片資料が出土しており、この時期の活動痕跡が認められる。

住居跡の分布を見てみると、中期後葉のⅠ～Ⅵ期には、遺跡の北東から入り込んでくる谷頭部を中心に住居跡が構築されている。この部分には多くの中期中葉の遺構も数多くあることから、この部分が集中的に反復利用されたと考えられる。一方で後期前葉にあたるⅨ期には谷頭部の西側と南に離れた部分に構築されており、同一の台地を利用しているが、明らかに占地する場所が異なっていることが読み取れる。

また墨古沢遺跡は、調査区西側の大部分を中世の大規模な土地利用によって、縄文時代の遺構の多くが消失したことも考慮しなければならない。しかし上述のように中期後葉と後期前葉の居住域が大きく変化していることから、集落に断絶があった可能性が高いと評価される。

(3) 墨古沢南Ⅰ遺跡 (図5)

墨古沢南Ⅰ遺跡は、高崎川から伸びる小支谷の最奥部に面する部分に立地している。調査は4回行われているが、そのうち1回は古沢南Ⅱ遺跡としてトレンチ調査のみが行われたものであることから、この部分の調査成果は分析対象外とした^(註4)。残りの3回にわたる調査((財)千葉県文化財センター2005、千葉県教育委員会2018、酒々井町教育委員会2019)で、住居跡62軒、土坑286基、竪穴状遺構1基、屋外炉4基等が検出されている。遺跡は全体的に、削平を受けており、遺存状況はよくなかった。そのため炉とピットのみ検出された時期不明とせざるをえない住居跡が相当数あることに留意する必要がある^(註5)。墨古沢南Ⅰ遺跡では、Ⅳ期に集落形成が開始される。確実にⅣ期と考えられる住居跡は1軒のみである。その後Ⅴ期には7軒と増加する。Ⅵ期には15軒となり、集落の最盛期と考えられる。Ⅶ期も14軒と前時期とほとんど変化はない。続くⅧ期には住居跡が7軒と減少し、称名寺式古段階に集落が終焉する。土坑や遺構外出土遺物にも称名寺式中段階以降から堀之内式のもの認められないことから、当遺跡での活動が終焉したことを示していると考えられる。住居跡は谷が入り込む西側に集中する様相が認められるが、時期毎に区切ってみるとまばらに分布しており、中央広場を中心とした環状集落と評価することは難しいと考える。

(4) 墨新山遺跡 (図6)

墨新山遺跡は、高崎川の支流である勝田川に面する台地上に立地している。調査は1回行われており((財)印旛郡市文化財センター1997)、住居跡17軒、土坑31基が検出されている。東北地方とのかかわりを示す「斜位土器埋設炉」が認識されたことでも注目された遺跡である。集落はⅤ期から開始される。Ⅴ期は3軒の住居跡が検出されている。続くⅥ期では6軒認められ、西側部分にまとまる様相が見て取れる。Ⅶ期は3軒と減少し、集落は終焉を迎える。その後のⅧ～Ⅸ期は、遺構は確認されず、遺構外で破片資料が出土するにとどまる。その点数も多くなく、時期的に連続性も認められないことから断続的に居住以外の活動がなされた可能性が考えられる。

(5) 墨木戸遺跡 (図7)

墨木戸遺跡は、高崎川の支流である勝田川に面する台地上に立地している。調査は4回にわたって実施されており、住居跡56軒、土坑473基が検出されている。同一台地上で隣接する墨新山遺跡とは一体の遺跡と捉えられる。墨木戸遺跡は、Ⅰ期から集落が構築される。しかしⅠ、Ⅱ期ともに1軒ずつと検出数は少なく、Ⅲ期にはいったん居住痕跡は途絶えてしまう。Ⅰ期、Ⅱ期においては、住居跡は少ないながら、フラスコ状土坑は8基検出されている点は注意される。Ⅳ期には2軒の住居跡が見つかり、再び居住痕跡が確認されるようになる。続くⅤ期には39軒検出されており、住居跡が激増する様相が認められる。この時期の住居跡は、遺跡の南東側で勝田川に直接流入する支谷に面する部分に集中して構築されている。遺構配置を見ると、住居跡は環状に配置されているようにも見えることから、環状集落跡であった可能性も指摘できよう。その後のⅥ期には住居跡が6軒とⅤ期に比べ激減する様相が見て取れる。Ⅵ期を最後に住居跡の構築も認められないことから、集落が終焉したと考えられる。Ⅶ期には土坑1基のみで、Ⅷ、Ⅸ期には遺構外から破片資料が出土するにとどまり、土地利用がほとんどされなかったものと評価できるだろう。

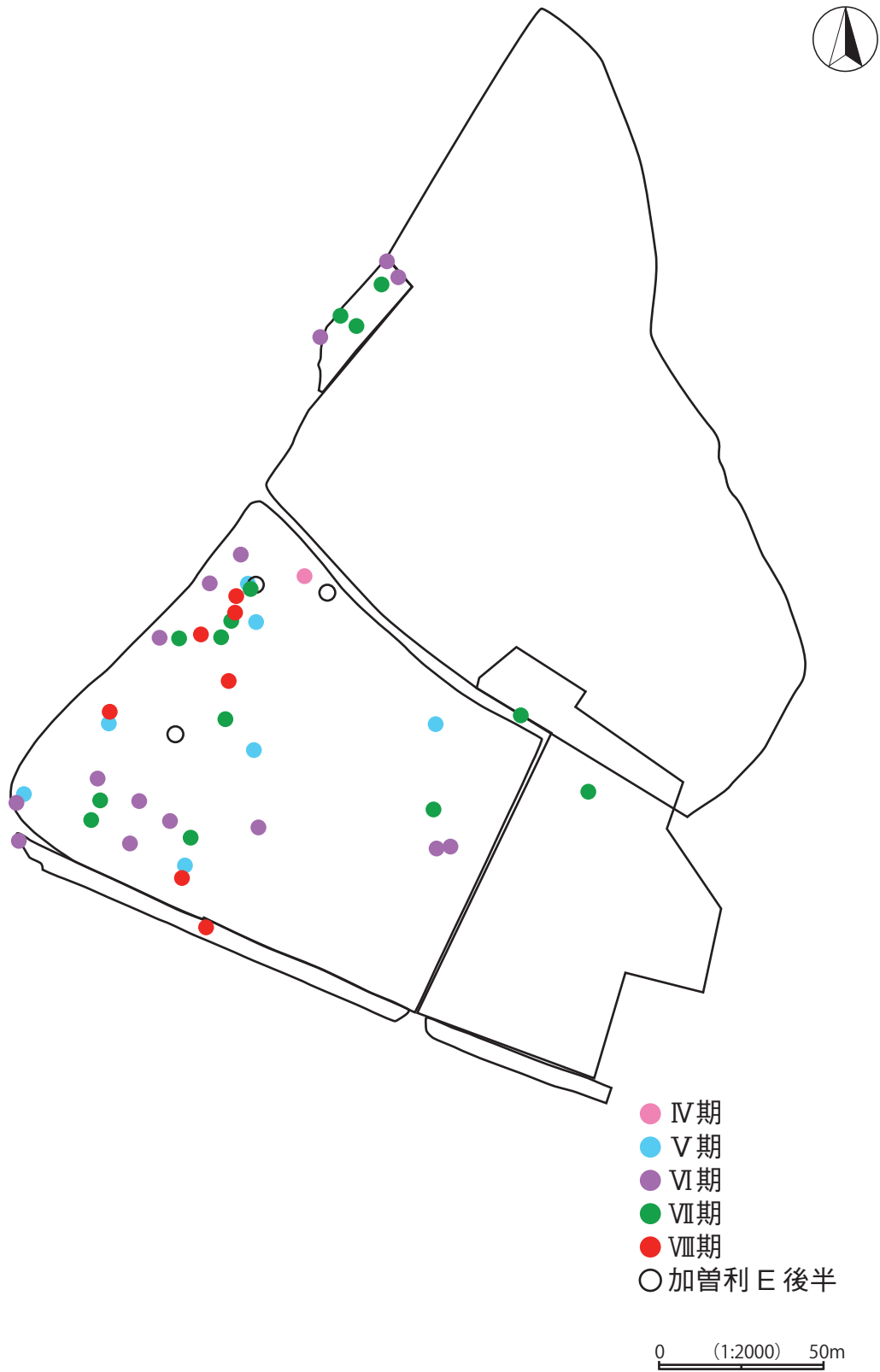


図5 墨古沢南 I 遺跡の住居跡分布図

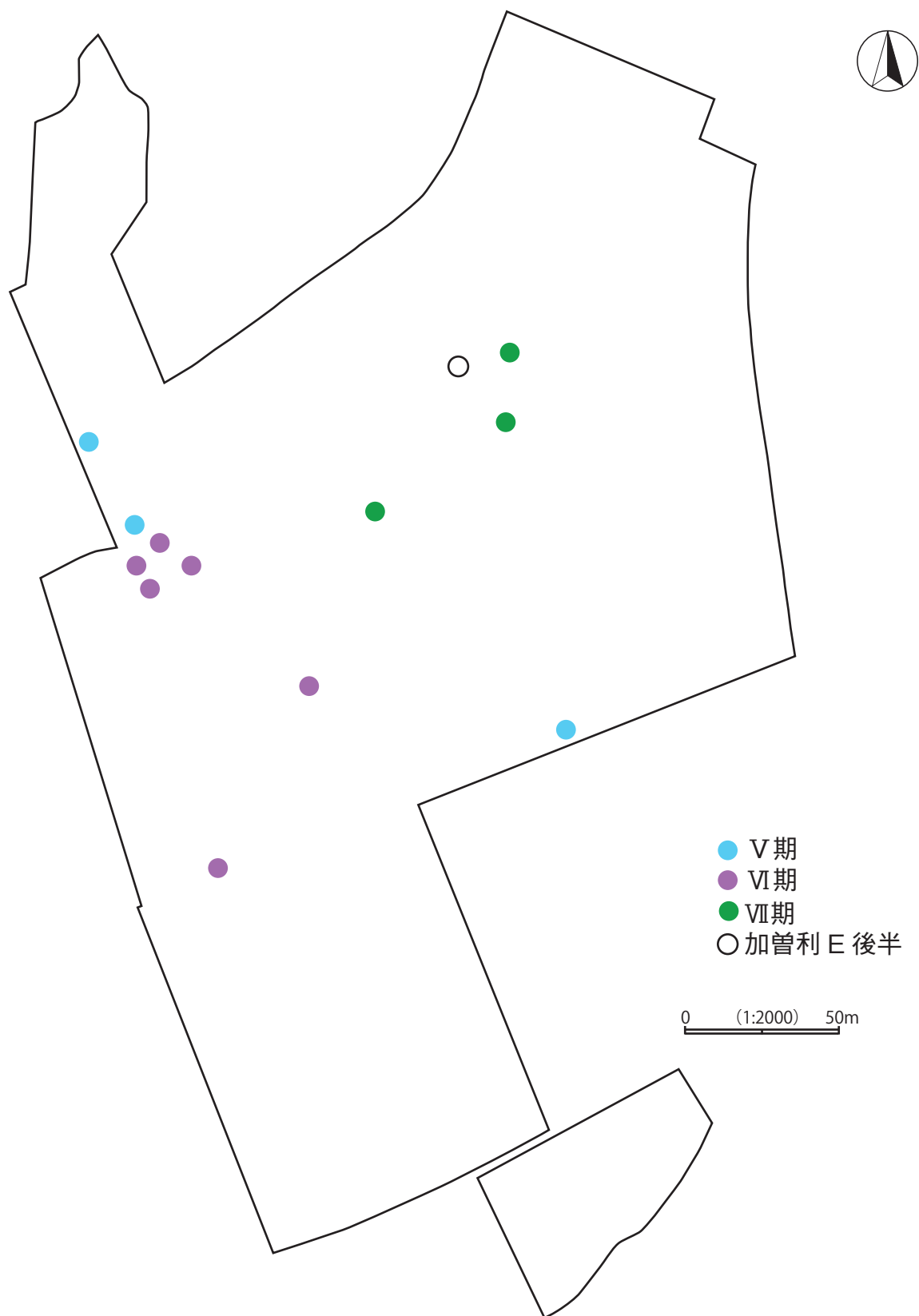


図6 墨新山遺跡の住居跡分布図

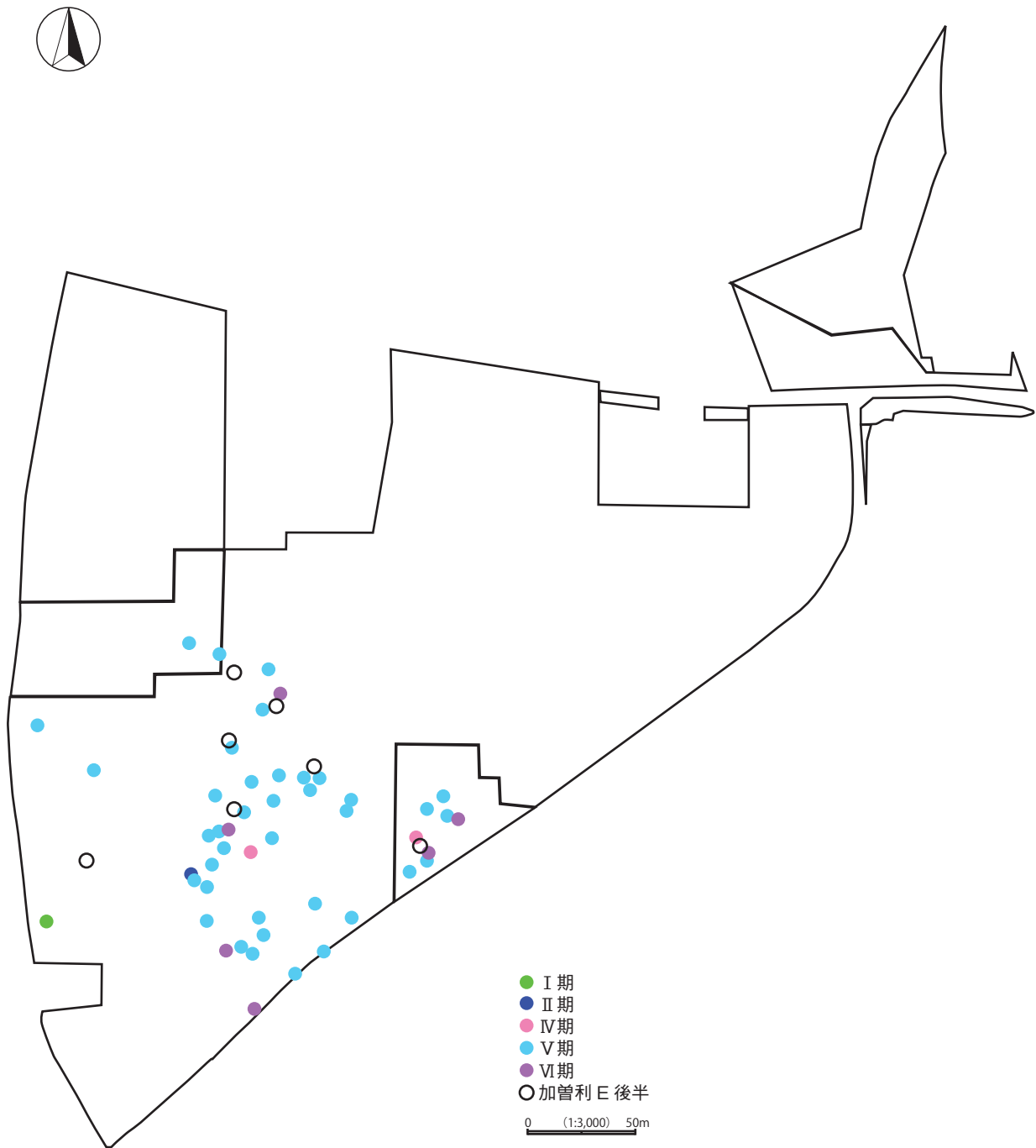


図7 墨木戸遺跡の住居跡分布図

(6) 墨古沢南Ⅱ遺跡、墨広畑遺跡

墨古沢南Ⅱ遺跡、墨広畑遺跡は、高崎川から伸びる支谷に面する部分に位置している。県道部分の道路改良工事に伴って調査が行われたのみであり、遺跡の内容についてはまだまだ不明な部分が多い。また両遺跡からは縄文時代をはじめとした遺構が検出されているが、本稿での分析対象となる時期の遺構は少ないため、ここで一括して扱うこととした。墨古沢南Ⅱ遺跡では、住居跡が4軒検出された。しかし出土遺物がほとんどなく、いずれの住居跡も時期不明とせざるを得なかった。また墨広畑遺跡では、3軒の住居跡が検出された。内訳は中期中葉（阿玉台Ⅰb式期）が1軒、Ⅲ期が2軒である。遺構外出土の土器も中期中葉が多いことから、当該期の集落跡が広がっていることも想定される。

3 各遺跡における時期ごとの動態の分析

ここでは前章で検討した各遺跡の時期ごとの動態を基に、集落の変遷について述べていく。検討を行ううえで、各遺跡の住居跡の配置図を組み合わせた図を作成した（第8図～16図）。これを基に各時期の様相についてまとめる。

(1) I期（図8）

この時期の住居跡は、墨古沢遺跡で3軒、墨木戸遺跡で1軒が認められる。墨古沢遺跡では、当該期の住居跡は全て有段住居であり、中期中葉までの土坑群や住居跡との重複が激しい部分に構築されているのが特徴的である。墨木戸遺跡ではこの時期から集落が開始されるが、住居跡1軒、土坑1基という状況で、活発に使用されていたとは言い難い状況にある。なおこの他の遺跡では当該期の遺構は認められず、遺物もほとんど出土しない状況にある。このことからI期では上述した2遺跡に活動が限定されており、その中でも中期中葉から続く墨古沢遺跡が活発に利用されていたと考えられる。

(2) II期（図9）

集落様相の傾向はI期とほぼ同様である。引き続き墨古沢遺跡で活発な土地利用が認められる。墨木戸遺跡では住居跡の検出は1軒に留まるが、フラスコ状土坑が6基認められる。そのほかの遺跡では遺構が認められない。

(3) III期（図10）

墨古沢遺跡、墨広畑遺跡で住居跡が認められる。墨古沢遺跡ではII期に引き続き住居跡が認められるが、検出軒数は減少する。II期まで住居跡が構築されていた墨木戸遺跡では住居跡は検出されず、土坑1基のみが検出されている。墨広畑遺跡では住居跡2軒が検出されている。

(4) IV期（図11）

墨古沢遺跡では18軒の住居跡が認められる。III期に比べ増加しており、今回対象とした遺跡群の中でも集中している様相が認められる。III期には住居跡が認められなかった墨木戸遺跡、墨古沢南Ⅰ遺跡にも住居跡が構築されるようになるが、いずれも1～2軒に止まっている。

(5) V期（図12）

墨古沢遺跡では引き続き住居跡が検出されているが、2軒と激減している。これと軌を一にして、その他の遺跡で住居跡が多く認められるようになる。墨新山遺跡ではこの時期から住居が認められるようになる。墨古沢南Ⅰ遺跡では7軒の住居跡が検出されており、IV期に比べ増加の傾向が見て取れる。墨木戸遺跡では39軒と大幅に増加する。特に勝田川とそこから伸びる支谷に面する部分に、多くの住居跡が集中し

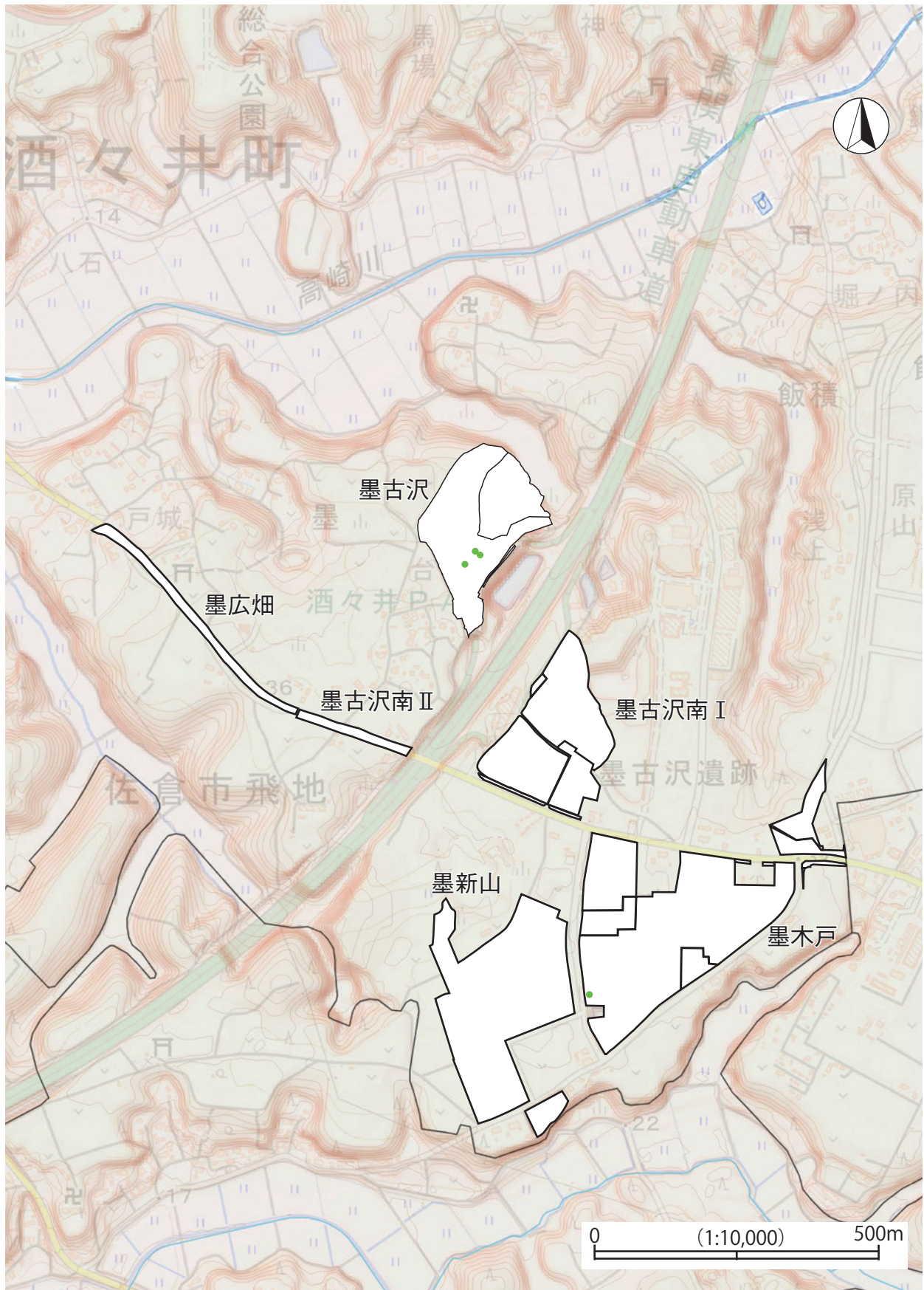


図8 I期の住居分布図

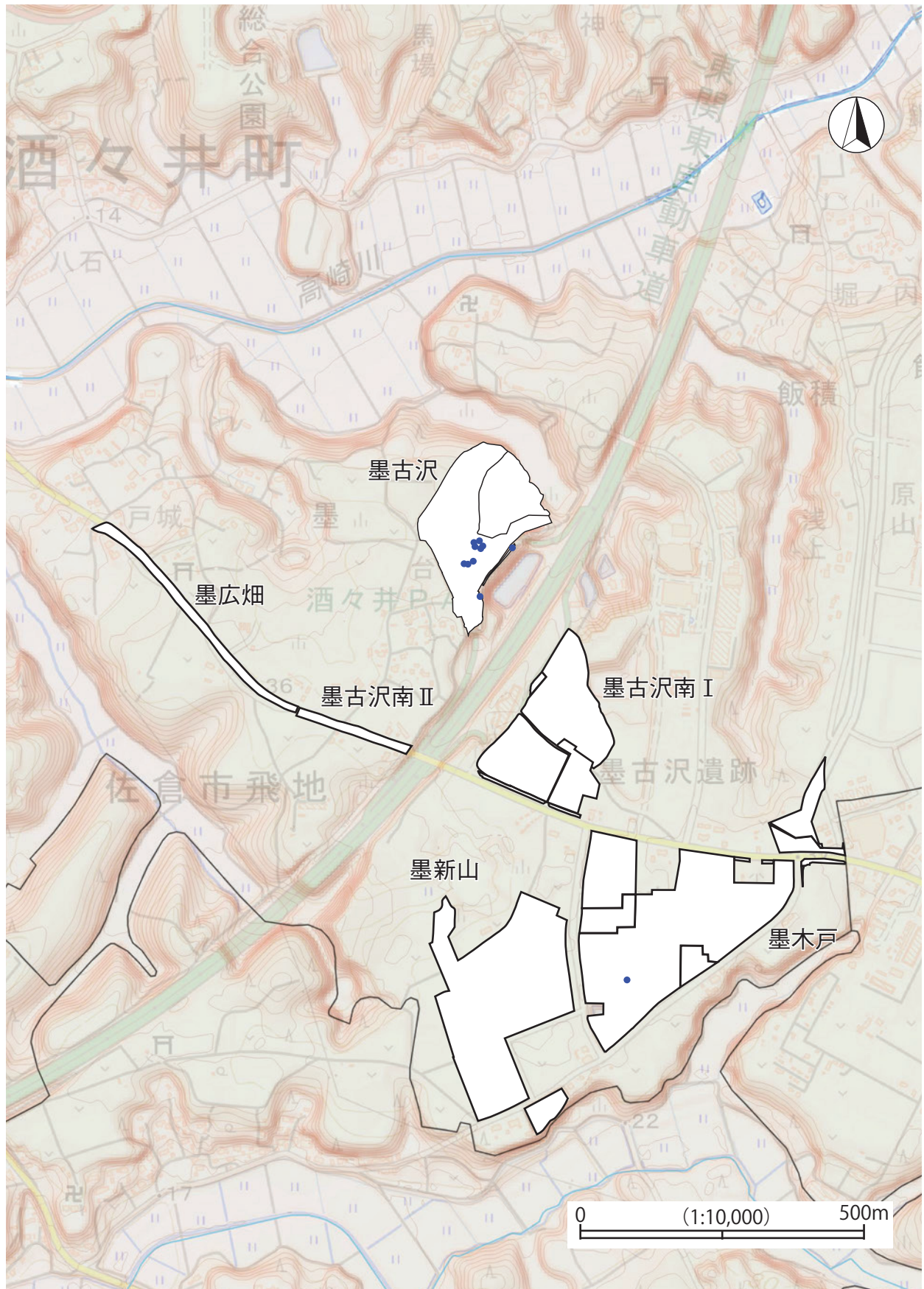


図9 II期の住居分布図

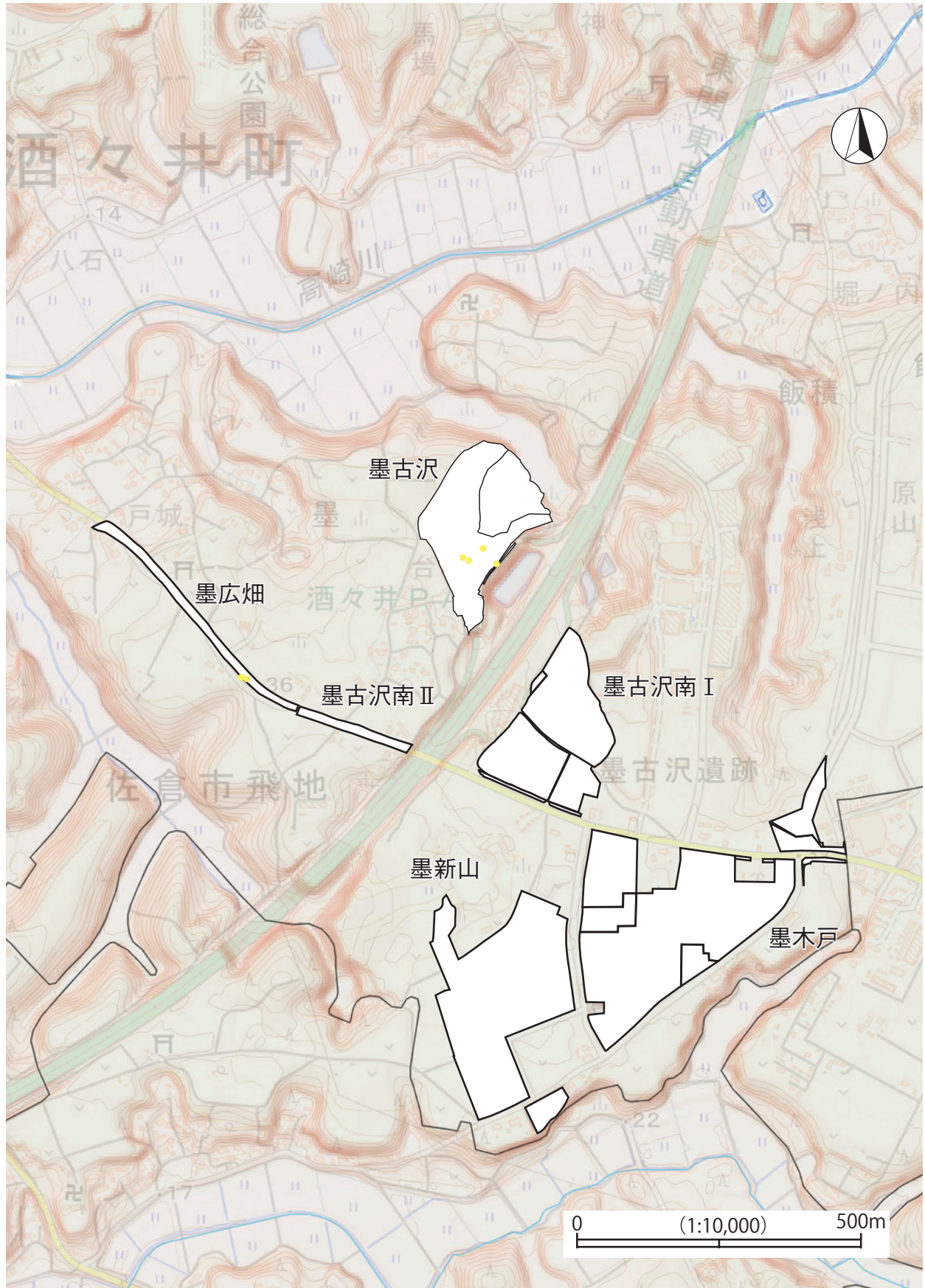


図10 Ⅲ期の住居分布図

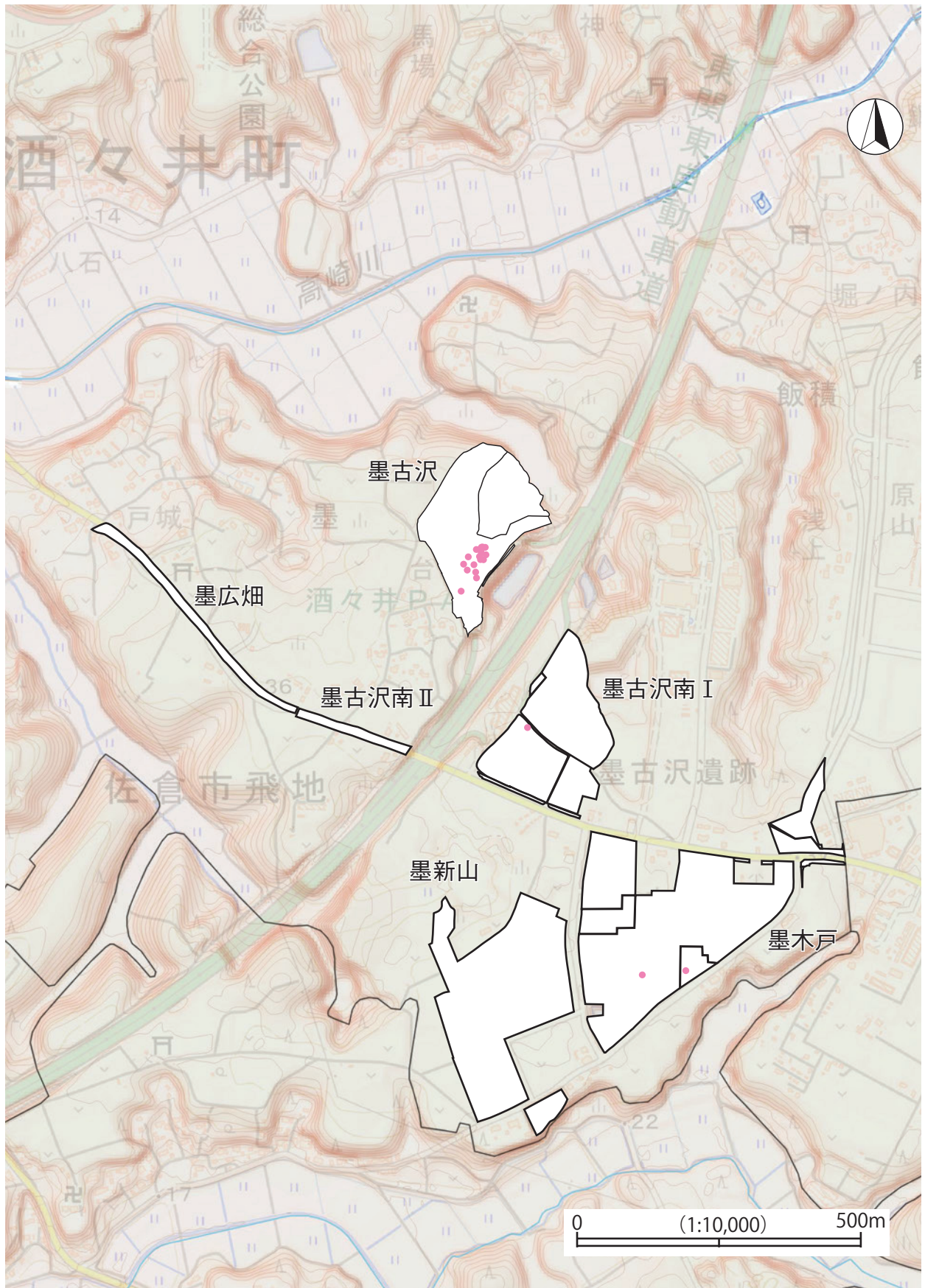


図11 IV期の住居分布図

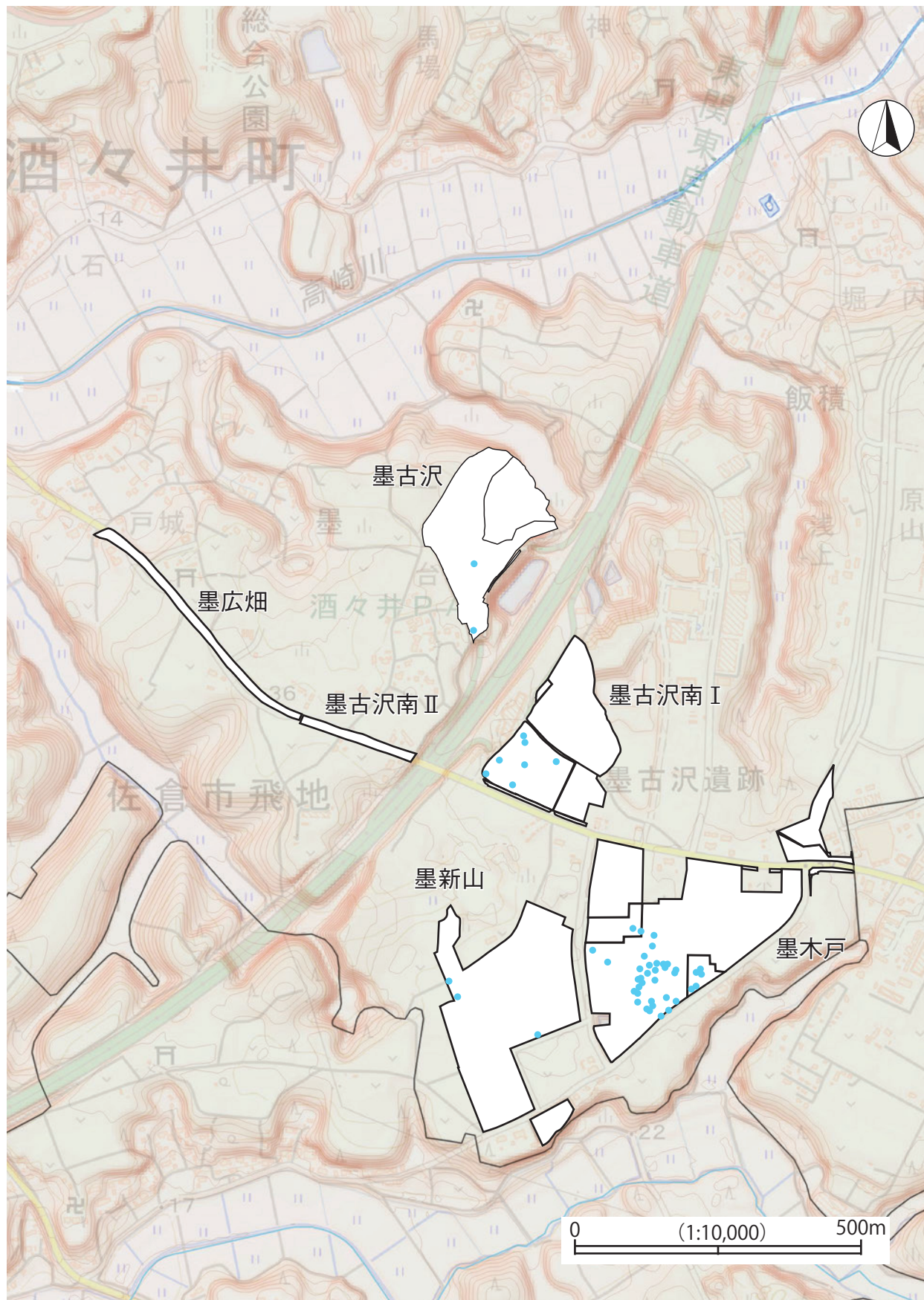


図12 V期の住居分布図

で構築されており、環状に分布している。Ⅴ期にはそれまで遺構が多く構築されていた墨古沢遺跡で少なくなると共に、周辺の遺跡で多くの遺構が構築されるようになる点が、大きな変化と捉えられる。

(6) Ⅵ期 (図13)

墨古沢遺跡では5軒、墨古沢南Ⅰ遺跡で15軒、墨新山遺跡、墨木戸遺跡で6軒ずつ住居跡が検出されている。墨木戸遺跡ではⅤ期から大幅に減少している。その一方で墨古沢南Ⅰ遺跡では増加している。また墨古沢遺跡、墨新山遺跡では微増する。

(7) Ⅶ期 (図14)

墨古沢南Ⅰ遺跡、墨新山遺跡で住居跡が検出されている。特に墨古沢南Ⅰ遺跡では14軒と、Ⅵ期から引き続き、住居跡の検出数が多い。墨新山遺跡は3軒が検出されている。中期中葉から住居跡が認められていた墨古沢遺跡ではこの時期の遺構が認められない。またⅤ期では住居跡が多く構築された墨木戸遺跡でも住居跡が認められず、土坑が1基のみ認められるようになる。

(8) Ⅷ期 (図15)

墨古沢南Ⅰ遺跡で7軒の住居跡が検出されているのみである。その墨古沢南Ⅰ遺跡でもⅥ期、Ⅶ期に比較すれば、住居跡の検出数は減少している点は注目される。

(9) Ⅸ期 (図16)

墨古沢遺跡では15軒の住居跡が検出されている。Ⅷ期に住居跡があった墨古沢南Ⅰ遺跡をはじめ、墨古沢遺跡以外の遺跡ではこの時期の遺構が認められない。

4 縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての集落遺跡の動態について

今回分析対象とした遺跡では、それぞれ集落の開始時期と終了時期に大きな違いが認められた。Ⅰ期からⅣ期までは墨古沢遺跡に遺構が集中している様相が見て取れる。墨古沢遺跡は中期中葉から、反復的に居住が繰り返されており、中期中葉の住居跡や土坑群に重複するように、その後の住居跡をはじめとした遺構が構築されており、加納のいう「同一地点での反復居住・集合的居住」(加納2002)という現象が認められる。Ⅲ期には墨広畑遺跡でも住居跡が検出されており、墨古沢遺跡との関連が注意されるが、調査された面積も広くはないため、様相は不明瞭な部分が多い。

その後のⅣ期とした加曾利E3式古段階にはそれまで遺構がほとんど認められなかった各遺跡で住居跡が検出されるようになる。これは加納が指摘する「非居住域への分散居住」(加納1995、2000、2002)と捉えておきたい。今後さらなる検討を要するが、加曾利E3式古段階くらいからこうした居住形態を指向している可能性が考えられる。そしてⅤ期には更なる変化が認められる。それまで住居跡の検出数が多かった墨古沢遺跡では減少し、各遺跡の住居跡検出数が増加する様相が認められる。墨木戸遺跡では勝田川に面する部分に、住居跡が集中する様相が見て取れ、環状に住居跡が構築されていることから、この時期に限定される環状集落跡と捉えることもできる。石井は、関東地方の当該期の集落跡について、中期中葉以降に営まれた拠点集落から引き継ぐ形で環状形態を残す事例と、それまで居住域とされていなかった地点に集落が営まれるようになる事例が存在すると指摘している(石井2001)。今回の分析事例では、それまで継続的に使用されてきた地点での居住活動が低下するのに対し、別地点に遺構が集中するという変化が読み取れた。今後さらに視野を広げて周辺遺跡との関係性を探る必要があるが、このⅤ期に集落のあり方に大きな変化が地域全体で起こっている可能性も考えられる。

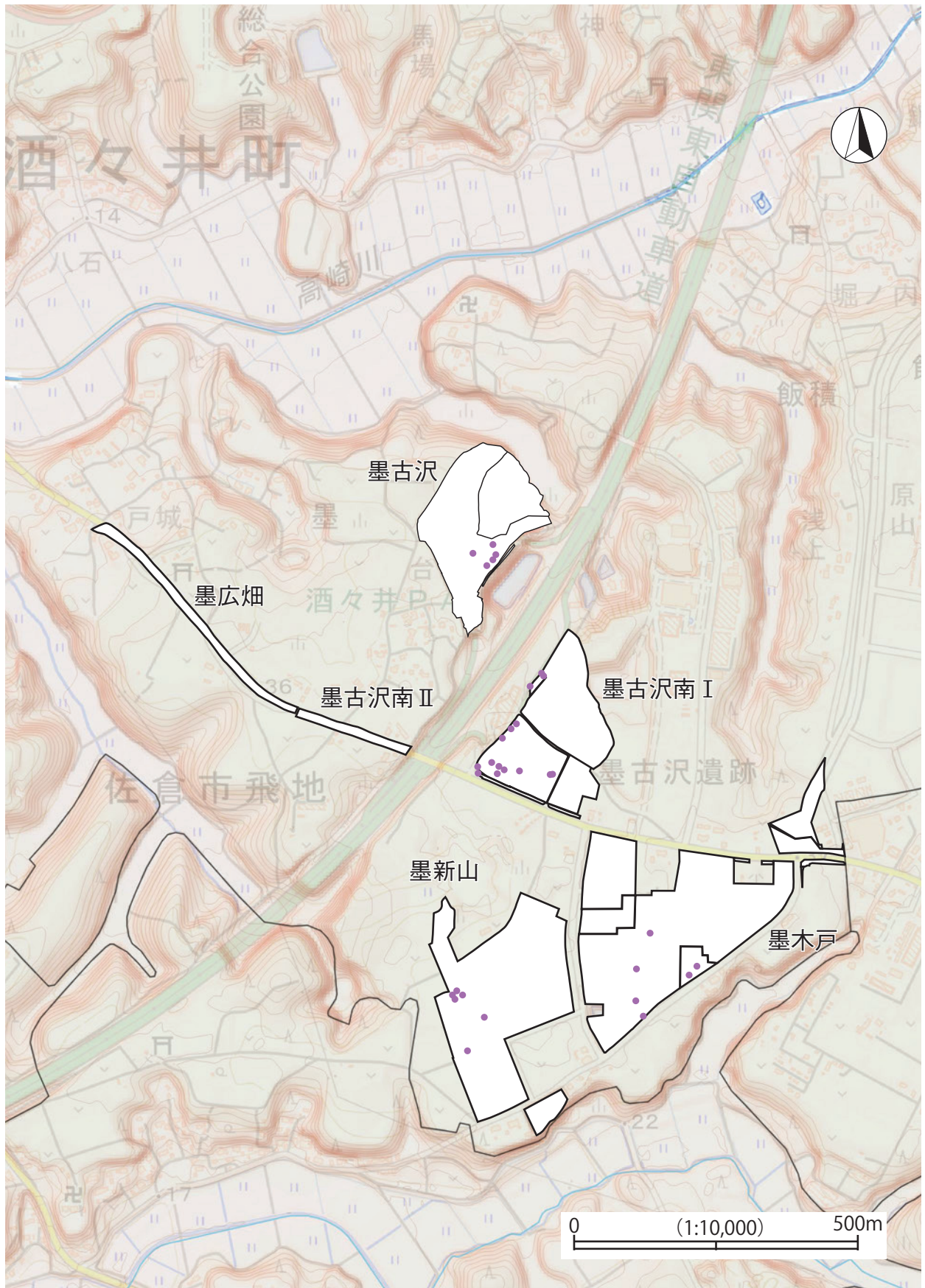


図13 VI期の住居分布図

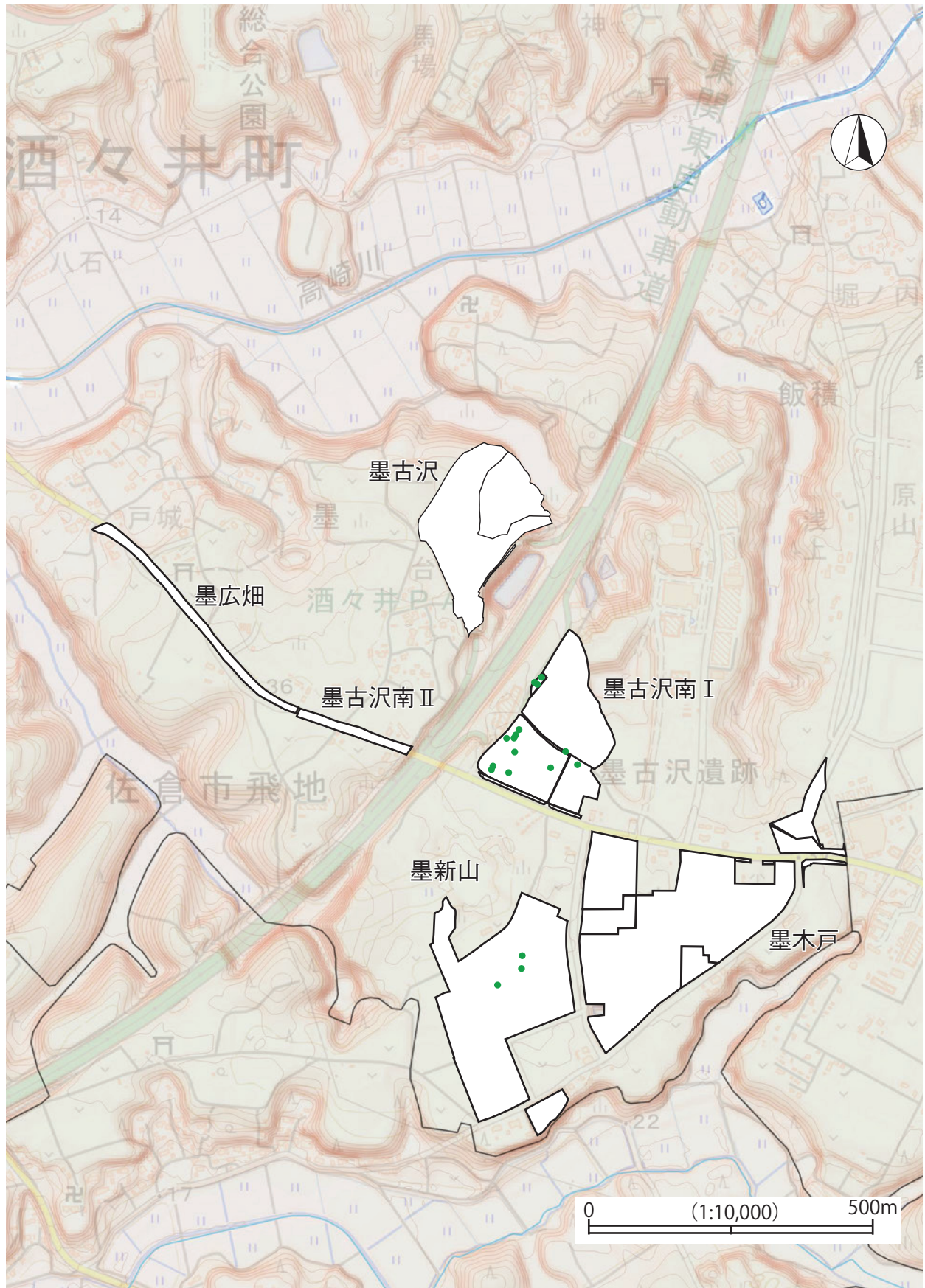


図14 VII期の住居分布図

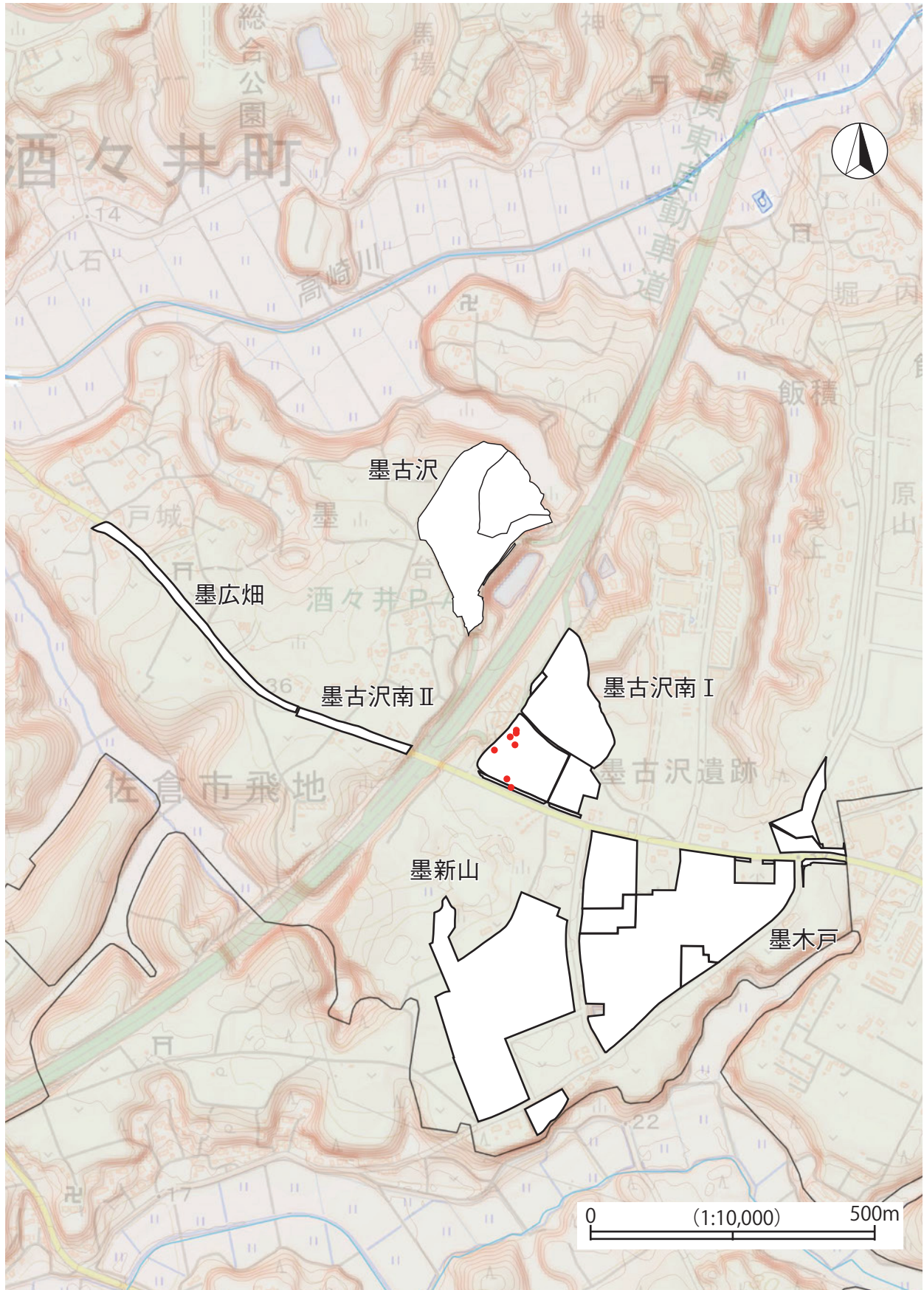


図15 VIII期の住居分布図

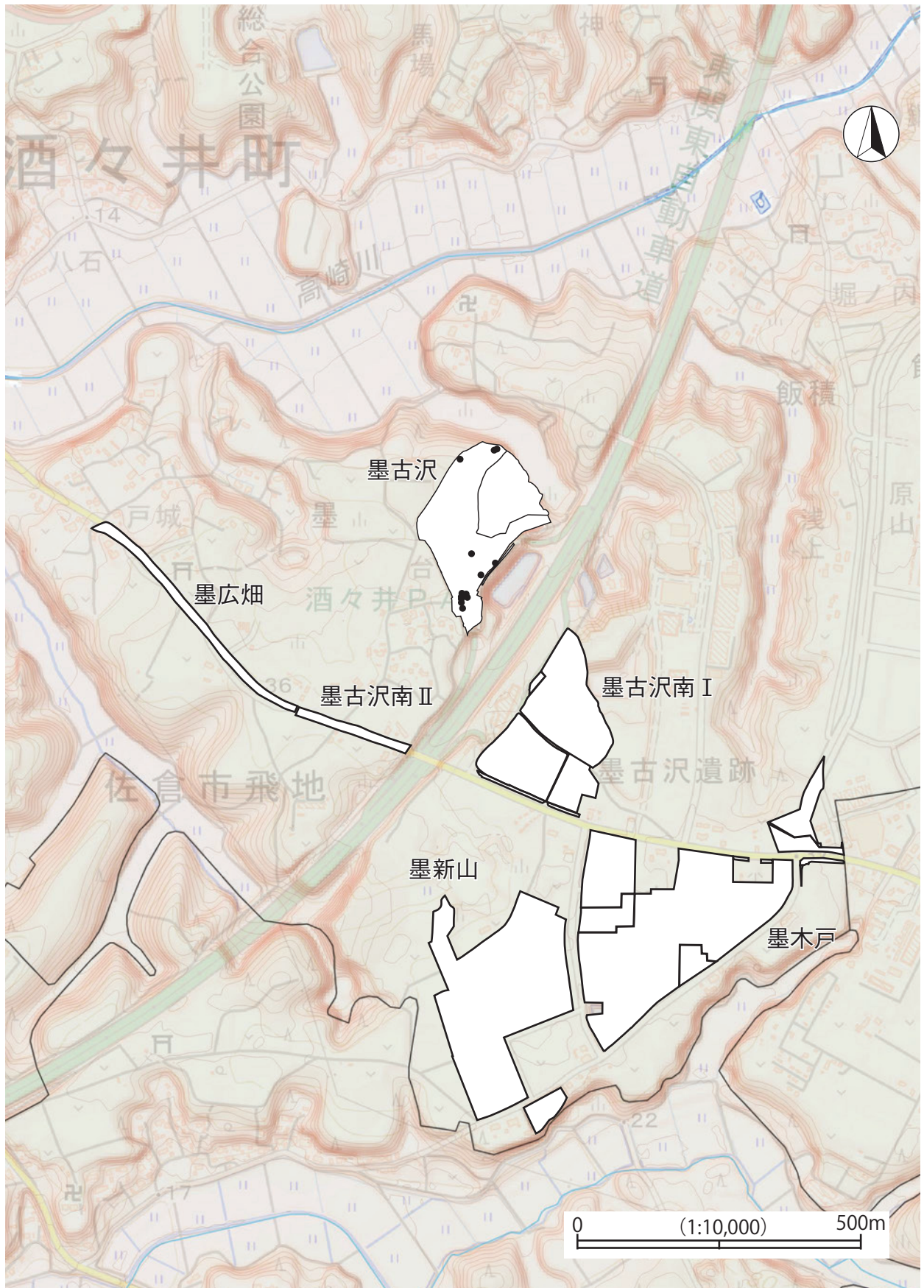


図16 Ⅹ期の住居分布図

続くⅥ期には各遺跡でまばらに住居跡が確認されており、住居跡が集中する様相は認められない。Ⅵ期から開始される集落は、千葉県を含む関東地方で認められ、「同一地点での反復居住・集合的居住」から「非居住域への分散居住」へと変化した大きな画期と考えられている（加納1995など）。今回対象とした遺跡群でも、反復的な居住を示すような遺構の集中等は認められず、分散的な居住がなされていたものと考えられる。

続くⅦ期には墨古沢南Ⅰ遺跡と墨新山遺跡に住居跡が検出されている。それまで長期間にわたり反復的に利用された墨古沢遺跡や、Ⅴ期に住居跡が集中した墨木戸遺跡にはこの時期の住居跡は確認されず、遺物もほとんど出土していない。Ⅷ期には墨古沢南Ⅰ遺跡のみ住居跡が検出されている。しかしこの遺跡においても、筆者が旧稿で指摘した（小澤2018）ように、住居跡覆土から出てくる土器片の数量の違いから、前の時期に比べ集落での活動が落ち込んでいる可能性は高い。ここで検討した結果、Ⅳ期からⅥ期にかけて分散居住という居住形態に変化したことで営まれた集落が、中期末葉から後期初頭に当たるⅧ期からⅧ期にかけて、さらに規模が縮小している様相が見て取れた。こうした現象は関東各地で指摘されてきたが、印旛沼西岸地域を分析した須賀博子は、遺物散布地を含めた遺跡数や遺跡分布に中期からの大きな差は認められないと指摘している。須賀はこの時期の遺構や遺物のあり方から、従来社会の急激な衰退や変化と捉えられてきた事象も、「利用する土地、食糧種の構成、利用技術体系の一連の変革・移行期」（須賀2017：P99）として考察していくことが必要としているが、今後さらなる検討が必要である。いずれにしても今回対象とした遺跡群では、分散的な居住形態をとる集落がさらに収縮していく様相が見て取れた。このことから、中期末葉から後期初頭において、集落や居住形態の変化とともに社会の収縮を含む大きな社会変化が起きたと考えたい。Ⅶ期に集落が営まれているのは、墨古沢南Ⅰ遺跡のみであることは上述したが、その墨古沢南Ⅰ遺跡ですら、称名寺式古段階までしか住居は認められない。後続する称名寺式中段階、新段階には住居跡が検出されていないことになり、この地域一帯で居住活動がいったん断絶している可能性が高い。この時期の破片資料は墨古沢遺跡を中心に認められるが、出土量は限定されている。

Ⅷ期には、墨古沢遺跡で住居跡が構築されるようになる。この事象について、今回対象とした遺跡群に近接する飯積原山遺跡の分析をした西川博孝は、中期にあった拠点集落への「回帰行動」と指摘している（西川2015）。加納は武士遺跡の分析を基に、この時期の集落について、「居住単位の独立性が強く、中期集落的・環状集落的性格(集合的居住)の崩壊の進行が生み出したひとつの到達点であると同時に従来の性格を脱却することができない」（加納2000：P98）と評価している。ここではより具体的な集落様相まで踏み込むことはできなかったが、断絶を含みつつも中期中葉以来の拠点的な性格を持つと考えられる墨古沢遺跡に再び集落が営まれるようになるのは、加納の指摘する「集合的居住の崩壊と再編成」（加納2000：P98）という現象を示していると考えられる。前述したように、この時期の住居跡は、Ⅰ期～Ⅵ期までに住居跡をはじめとする遺構群が、反復的に構築されてきた場所とは異なる場所に占地されていることも「再編成」という現象を強く示すものと捉えられる。続く堀之内Ⅱ式には再び集落活動が落ち込んでしまうが、これは千葉県域全体の傾向の可能性もある（小澤2024b）。

本稿では、中期後葉から後期前葉までの集落動態を検討した。中期中葉から反復的に利用される遺跡が、Ⅳ期（加曾利E3式）以降に分散居住に転じた様相をとらえることができた。分散居住の結果、墨木戸遺跡のようにそれまで利用が低調であった部分に、多くの住居跡が構築される現象も確認された。しかし加曾利E4式から称名寺式にかけて、こうした集落も終焉を迎えていき遺跡数や遺構数が減少していくこと

から、社会が収縮している可能性を迫認した。特に称名寺式中段階から堀之内式成立期にかけては遺構が認められないことから、集落活動が断絶していたことが推測される。この時期は低地の利用の活発化など大きな変化が認められ、こうした変化が集落のあり方に影響している可能性が考えられる。堀之内式には再び墨古沢遺跡に集落が営まれるが、中期とは別の地点を利用していることを示した。

おわりに

以上、中期後葉から後期前葉の集落遺跡を検討し集落動態について言及した。今回は住居跡を中心に検討を行ったため、やや雑駁な議論となってしまった。また住居跡についても建替えを含めより細かな検討や、炉をはじめとした住居内部の構造まで触れることができなかった。そして土坑をはじめ、その他の遺構の検討も不十分となってしまった。今後、こうした遺構の研究も深めていくとともに、当該期の様々な文化事象を加味したうえで、当該期の社会様相について追及していく必要があるだろう。先行研究を見れば、中期末葉から後期初頭に人口減少があったかは議論があるところだが、生業形態をはじめ、社会が大きく変化したというのは共通理解となっている。この変化については、今後も微視的・巨視的な視点から検討を進めていきたい。

註

(註1) 墨古沢南Ⅰ遺跡という遺跡名は、平成11・12年度に行われた東関東自動車道酒々井パーキングエリアに伴う発掘調査や、平成27～29年度の範囲確認調査の時点では使用されていたが、平成30年(2018年)3月30日に墨古沢遺跡、墨古沢南Ⅰ遺跡、墨古沢南Ⅱ遺跡の3遺跡が統合されて、「墨古沢遺跡」となった(酒々井町2019)ため、現在では使用されていない。しかし本稿での検討の中で、統合前の墨古沢遺跡と墨古沢南Ⅰ遺跡は、盛行する時期や集落の性格が大きく異なることがわかり、中期後葉から後期前葉の集落の動態を検討するには、統合前の遺跡名を使用する方がわかりやすいと判断した。このため本稿では便宜的に統合前の内容で遺跡名を使用して記述を行う。

(註2) 本稿では上述の通り加曽利E式の編年は、研究史を踏まえアラビア数字による細別呼称を使用する。しかし加曽利E式終末における研究は、ローマ数字による細別呼称を用いて進められてきた経緯があり、「加曽利EV式」という呼称も同様である。現状では「加曽利EIV式」と「加曽利E4式」の終末は同じと考えており、アラビア数字による編年を用いる筆者が、称名寺式に伴う加曽利E式について、「加曽利EV式」を使うことは、編年上において問題があるとは考えていないが、「加曽利EV式」の型式内容やその範囲については、様々な議論があるところであり、この時期の加曽利E式の細別をアラビア数字で呼称することは混乱を招く可能性があることから控えている。

(註3) 加曽利E4式については、図2中段で示したように、古段階と新段階の2時期に分かれると考えられる(図中破線より上が古段階、下が新段階)。古段階では新段階に比べ、「対向U字交錯文」がほとんど入り組んでいない点や、無文部が狭い点の特徴として挙げられるが、破片資料で細かな時期比定を行うには難しい部分も多い。その一方で、この時期の住居跡の時期決定を破片資料に頼らざるを得ないことが多く、ここでは2細分せずに扱うこととした。

(註4) 酒々井パーキングエリア(上り線)の北側に隣接する部分で、野球場建設にあたり「古沢南Ⅱ遺跡」として確認調査が行われている部分である。住居跡をはじめとした遺構も検出されているが、遺構は盛土で保護することとなり、住居跡の本格的な調査は行われていないため、ここでは分析対象外とした。報告書にはⅥ期～Ⅷ期にかけての土器が多く報告されていることから、この時期の集落が広がっていることはほぼ確実と言えるだろう。

(註5) 加曽利E3式期の住居跡は、堅穴の掘り込みが浅くなる傾向が指摘されている(加納1995ほか)。武蔵野台地では調布市原山遺跡の調査において、加曽利E3式期の住居跡が堅穴として確認できないという事実が指摘された(黒尾ほか1990)。宇佐美哲也は、この堅穴の掘り込みが浅い住居跡を「加曽利E3面」想定住居」と呼称し、移動性の高い社会へ移行していく様相を示している可能性を指摘した(宇佐美1998、2009)。また港北ニュータウン遺跡群の中期集落の動態を検討した石井もこの時期の住居跡の掘り込みが浅くなる事実を指摘しており、集落の衰退と関連付けて考察を行っている

(石井2014)。

墨古沢南Ⅰ遺跡では、全体的に削平されていることに加え、こうした时期的な住居跡の構造により、時期不明とせざるをえない住居跡が多くあったが、これらの住居跡は、掘り込みが浅いという特徴と墨古沢南Ⅰ遺跡全体の出土遺構、遺物の傾向から基本的に加曾利E3式以降のものでよいと考えられる。墨古沢南Ⅰ遺跡からは、中期中葉から加曾利E式前半の遺構、遺物は検出されていないことから、分散居住へと居住形態が変化していった結果、営まれた集落跡と評価できる。

参考文献

- 石井寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究収録』第9冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井寛 1993「堀之内1式期土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡』（財）横浜市ふるさと歴史財団
- 石井寛 2001「関東地方における集落変遷の画期と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 石井寛 2014「縄文中期から後期への推移に関する一考察 - 横浜市港北N.T.遺跡群を対象に」『横浜市立歴史博物館紀要』第18号 横浜市立歴史博物館
- 稲村晃嗣 1990「加曾利E式系列の土器群」『調査研究収録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 宇佐美哲也 1998「加曾利E3（新）式期における居住痕跡の一様相 - 原山地区第一地点仮称「加曾利E3面」想定住居の検討 -」『シンポジウム 縄文集落研究の新地平2 発表要旨』縄文集落研究グループ
- 宇佐美哲也 2009「縄文時代中期における集落景観の再検討（1）」『Archaeo Clio』第10号 東京学芸大学考古学研究会
- 大内千年 2008「千葉県における小規模集落の分析 - 中期中葉土器編年に関する補足・市原市中潤ヶ広遺跡の事例を手がかりに -」『縄文研究の新地平(続)~堅穴住居・集落調査のリサーチデザイン~』六一書房
- 大村裕 1995「Ⅳ.考察 中峠遺跡第3次調査出土の加曾利E式（古）土器の検討」『下総考古学』14、下総考古学研究会
- 大村裕 2017「2.中峠遺跡出土の加曾利E式古における口唇部形態・隆線貼付手法の観察」『下総考古学』24、下総考古学研究会
- 小澤政彦 2018「第3章 総括」『酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡（2）』千葉県教育委員会
- 小澤政彦 2024a「房総における中期末葉から後期初頭の土器群」『令和6年度加曾利貝塚E地点・B地点発掘100周年記念シンポジウム 加曾利E式土器の再検討』千葉市立加曾利貝塚博物館
- 小澤政彦 2024b「東関東の堀之内2式について」『第19回東海縄文研究会・静岡大会第3回東海縄文研究会シンポジウム「東海からみた後期前葉土器群」予稿集』東海縄文研究会
- 加納実 1989「千葉県における加曾利E式土器後半の様相」『第3回 縄文セミナー 縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所
- 加納実 1994「加曾利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析」『貝塚博物館紀要』第21号、千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納実 1995「下総台地における加曾利EⅢ式期の諸問題 - 集落の成立に関する予察を中心に -」『千葉県文化財センター研究紀要16 - 20周年記念論集 -』（財）千葉県文化財センター
- 加納実 2000「千葉県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 加納実 2002「非居住域への分散居住が示す社会」『縄文社会論（上）』同成社
- 加納実 2024「下総台地における加曾利EⅢ・Ⅳ式土器の編年学的研究の現状と課題」『令和6年度加曾利貝塚E地点・B地点発掘100周年記念シンポジウム 加曾利E式土器の再検討』千葉市立加曾利貝塚博物館
- 黒尾和久・宇佐美哲也ほか 1990『はらやま - 都営調布柴崎一丁目第2住宅建て替えに伴う発掘調査』調布市原山遺跡調査会（公財）印旛郡市文化財センター 2013『墨木戸遺跡（第4次） - 都市計画道路墨七栄線埋蔵文化財調査委託 -』（公財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第324集
- （公財）印旛郡市文化財センター 2014『墨木戸遺跡（第3次） 柳沢牧墨木戸境野馬土手 - 地域自主戦略交付金委託（文化財調査）』（公財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第332集
- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定(補)」『シンポジウム 縄文集落研究の新地平3 - 勝坂から曾利へ - 発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- （財）印旛郡市文化財センター 1987『千葉県印旛郡酒々井町古沢南Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター

- －発掘調査報告書第8集
- (財)印旛郡市文化財センター 1995『千葉県印旛郡酒々井町墨木戸－(仮)すかいらーく酒々井工場建設予定地内埋蔵文化財調査－』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第100集
- (財)印旛郡市文化財センター 1997『千葉県印旛郡酒々井町墨新山遺跡－ホソヤミート調理食品工場造成地内埋蔵文化財調査報告書－』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第130集
- (財)印旛郡市文化財センター 1999『千葉県印旛郡酒々井町墨木戸遺跡(第2次)－すかいらーく酒々井工場建設予定地内埋蔵文化財調査－』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第151集
- (財)千葉県文化財センター 1981「第4章 酒々井町墨古沢遺跡」『パイプライン－新東京国際空港航空燃料パイプライン事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- (財)千葉県文化財センター 2005『東関東自動車道水戸線酒々井PA 埋蔵文化財調査報告書2－酒々井町墨古沢南I遺跡－縄文時代編』(財)千葉県文化財センター調査報告第505集
- (財)千葉県教育振興財団 2007『東関東自動車道水戸線酒々井PA 埋蔵文化財調査報告書4－酒々井町墨古沢遺跡 旧石器・縄文時代編』(財)千葉県教育振興財団調査報告第570集
- 酒々井町教育委員会 2019『千葉県印旛郡酒々井町墨古沢遺跡総括報告書－下総台地に現存する日本最大級の旧石器時代環状ブロック群－』
- 下総考古学研究会 1998『下総考古学』15、下総考古学研究会
- 称名寺式土器検討会 2017「シンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」の報告」『横浜市歴史博物館紀要』VOL.21 横浜市歴史博物館
- 須賀博子 2017「東関東内陸部における縄文中・後期の遺跡群動態－印旛沼西南岸地域の検討から－」『縄文時代』28、縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1990a「称名寺式土器」『調査研究収録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1990b「称名寺・堀之内1式の諸問題」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 2007「称名寺式土器研究の諸問題」『縄文中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
- 千葉県教育委員会 2018『酒々井町墨古沢南I遺跡(2)－主要地方道富里酒々井線(印旛郡酒々井町墨)道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第23集
- 西川博孝 2015「第6章第2節 縄文時代」『酒々井町飯積原山遺跡4－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書－』(公財)千葉県教育振興財団
- 山内清男 1940→1967「第IX輯 加曾利E式」『日本先史土器図譜』先史考古学会
- 山内清男 1969→1974「縄文草創期の諸問題」『MUSEUM』第224号(→『日本考古学選集21山内清男集』築地書館)

